

【指定テーマ 1 江戸期以降の海上輸送・物流史】

《研究論文（査読付き）》

## 幕末期上方酒造家の廻船所有 —酒荷の積荷動向と運用の分析を通して—

大浦 和也  
(白鹿記念酒造博物館)

### 目 次

1. はじめに
2. 幕末期樽廻船の稼働状況と西宮の酒造業
3. 江戸積酒荷の積荷動向と廻船運用
4. おわりに

### 1. はじめに

上方の清酒醸造業は近世前期に始まり、その後江戸を市場とする江戸積酒造家は本稿で分析対象とする西宮を含む摂泉十二郷<sup>1)</sup>を形成した。江戸に送られた酒は、新川周辺に集まる下り酒を専門に扱う問屋から仲買・小売りを通じて市中に流通していた。

本稿では上方の江戸積酒造家から江戸の下り酒問屋への酒荷輸送を担った樽廻船について考察する。樽廻船の先行研究では、柚木学<sup>2)</sup>が樽廻船の成立過程や、酒荷以外の荷物輸送で菱垣廻船と繰り広げた積荷獲得競争の実態、本稿に關係する成果としては樽廻船の経営主体が、幕末期に酒造家に集中していった姿を明らかにした。具体的には、酒造家自らが船主となる直接支配、他の酒造家が船主である樽廻船に出資して配当を受け取る間接支配に類型化し、さらに間接支配には廻船代銀に対する出資割合に応じて配当を得る徳用配分型、一定の金額を加入銀として貸付けて廻船運用益の大小に関わりなく利息を取り、5～10年で返済させる年賦償還型に分かれることを、船主と出資者が出資額・条件を取り決めた廻船加入証文の分析から明らかにした。さらに、間接支配について「御手酒積方之儀者何程荷糶（糶か）之節二而も式拾太宛無相違積入可申候」<sup>3)</sup>といった記載から、出資者側には定積特権の獲得、一方で出資を受入れる船主側には内証運賃増契約<sup>4)</sup>と難船時の危険分散といった、双方への利益となっていたことを指摘した。加藤慶一郎<sup>5)</sup>は、廻船加入の類型が徳用配分型から年賦償還型へ移行していたことに注目し、幕末期特有の物価高騰に

<sup>1)</sup> 柚木学『近世灘酒経済史』（ミネルヴァ書房、1965年）23頁 大坂三郷・伝法・北在・池田・伊丹・尼崎・西宮・兵庫・今津・上灘・下灘・堺の十二郷。安永～天明期頃に成立したとする。

<sup>2)</sup> 前掲注1) 201～250頁

<sup>3)</sup> 白鹿記念酒造博物館所蔵辰馬本家文書 未整理史料「廻船加入証文之事」（七福丸） 引用した史料には、出資者の酒荷である手酒については、船の輸送能力を上回る量の積込みを希望する酒荷があった場合（＝荷糶現象）でも、二十太（＝40樽）は必ず積込むという、定積特権の文言が記されている。

<sup>4)</sup> 柚木学『近世海運史の研究』（法政大学出版局、1979年）147頁 樽廻船の運賃は、摂泉十二郷酒造仲間で決められている。この運賃に加えて、船主と出資する酒造家の間で個別に別途支払われる増運賃の契約。

<sup>5)</sup> 加藤慶一郎「樽廻船の加入形態に関する一考察」（『流通科学大学論集-人間・社会・自然編』第20巻第1 2007年）

伴う実質運賃の減少を補うために内証運賃増を図ったことが要因であると指摘している。

このほか上村雅洋は、幕末維新期の魚崎・今津両郷から江戸へ出荷される酒荷の送り状をまとめた「一紙帳」<sup>6)</sup>を分析し、魚崎の赤穂屋・山路家、今津の千足家の事例から、酒造家が廻船を所有する意義について、同族荷物の優先的な積付、酒価格や需給に応じた輸送の有利性<sup>7)</sup>、運賃の抑制<sup>8)</sup>にあると指摘した。

また、上方以外では曲田浩和が、上方に続く第二の清酒生産地で「中国酒」<sup>9)</sup>と称された尾張の酒荷輸送について上方酒造家同様に廻船所有に至った経緯を明らかにしている<sup>10)</sup>。

以上のように先行研究でも、酒荷輸送について多くの成果が出されているが、いずれも酒造家個別の積荷動向の検討は不十分なままに結論付けられている。よって本稿では現在も清酒白鹿の醸造元として知られる西宮の酒造家辰屋吉左衛門家の史料<sup>11)</sup>から酒造家個別の積荷動向を分析する。具体的には、まず幕末期の江戸入津樽数・艘数<sup>12)</sup>といった酒荷輸送の全体像の再検討を行う。その上で辰屋個別の積荷動向、出荷時の廻船利用実態を分析する。さらに、江戸市場の動向と辰屋所有廻船の運用の関係を分析する。これらを通して、酒造家による廻船所有の意義を明らかにする。

## 2. 幕末期樽廻船の稼働状況と西宮の酒造業

### 2. 1 幕末期樽廻船の稼働状況

ここでは本稿で対象とする幕末期の酒荷輸送の全体像の再検討を行う。柚木は近世後期以降の上方酒造業について、文化、文政期の勝手造り令<sup>13)</sup>下、新興の灘・今津が発展を遂げたが、天保3年<sup>14)</sup>同地域に対する酒造株が交付されたことにより、成長が抑制されたとしている。続く幕末期には、摂泉十二郷の中でも、灘・伊丹が減少傾向、西宮・今津は増加傾向と対照的な状況にあったとしている<sup>15)</sup>。

まずは、柚木の示した幕末期上方酒造業の状況について、「江戸月々入津高書抜帳」<sup>16)</sup>、「東京月々入津高書抜帳」<sup>16)</sup>から分析を加えたい。この史料には、弘化3年～明治4年

<sup>6)</sup> 関西学院大学図書館収蔵魚崎酒造組合文書「一紙帳」(安政6・万延元・文久2・元治元年・慶応元～3・明治元～2・4～7・11～12年)、同館収蔵今津組合文書「一紙帳」(慶応2年)

<sup>7)</sup> 上村雅洋「幕末・維新期の灘酒輸送」(『日本水上交通史論集第四巻 江戸・上方間の水上交通史』、柚木学編、文献出版、1991年)450頁

<sup>8)</sup> 同「近世日本海運史の研究」(吉川弘文館、1994年)120～122頁(初出『大阪大学経済学』第二十七巻第四号、1978年)

<sup>9)</sup> 神戸税務監督局『灘酒沿革誌』(弘文堂、1907年)148頁「往事、江戸ニ於テ参河・尾張等ヨリ廻漕スルモノヲ總テ中國酒ト稱シ(後略)」とあり、三河・尾張で生産された酒は江戸で「中国酒」と一般的に称された。

<sup>10)</sup> 曲田浩和「幕末期における酒造家と廻船経営：盛田家文書の船勘定帳の分析」(『知多半島の歴史と現在』No.22、2018年)

<sup>11)</sup> 同家の史料は白鹿記念酒造博物館で辰馬本家文書として所蔵している。尚、辰馬本家文書では、当主名について近世文書では「辰屋吉左衛門」「辰吉左衛門」と表記され、明治以降の近代文書では「辰馬吉左衛門」と表記されている。本稿では幕末期を対象とするため、当主名を「辰屋吉左衛門」として論じる。

<sup>12)</sup> 江戸入津樽数・艘数とは、江戸へ入港する廻船によって輸送されてきた樽数と廻船数を示す。近世文書では「入津」という表記が一般的であるため、本稿では入港という意味で「入津」の語を使用する。

<sup>13)</sup> 前掲注1)51～55頁 災害等の理由で米価が高騰する年は、清酒生産による米の消費を抑える目的で幕府による酒造制限令が発令された。この酒造制限令とは対照的に、米価安の際は勝手造り令として、元来酒造を許された酒造株保有者のみならず、酒造株保有者以外にも酒造を許された。

<sup>14)</sup> 本稿では和暦を使用するが、対応する西暦をここにまとめて記す。文政(西暦1818-1830)天保(1830-1844)弘化(1844-1848)嘉永(1848-1854)安政(1854-1860)万延(1860-1861)文久(1861-1864)元治(1864-1865)慶応(1865-1868)

<sup>15)</sup> 前掲注1)73～82頁及び柚木学「酒造りの歴史」(雄山閣BOOKS、1987年)299～303頁。尚、文政4・5・11・12、天保元～3・14、弘化2、嘉永4・6、安政3・4、慶応2年の摂泉十二郷からの江戸入津樽数について、複数の史料から析出したデータに依拠しているが、その中には同時代史料ではない史料(安政4)や、必ずしも入津樽数との記載のない史料(慶応2)も含まれている。

<sup>16)</sup> 白鹿記念酒造博物館所蔵辰馬本家文書 史料番号1608「江戸月々入津高書抜帳」、史料番号旧3553「東京月々入津高書抜帳」尚、この史料の数値は、柚木が示した各地域別入津樽数の合計とはかなりの開きがある年がある。しかし、注15)で示したような理由から本稿では「江戸月々入津高書抜帳」、「東京月々入津高書抜帳」の数値を採用する。

にかけての月別の江戸入津樽数・艘数、その内中国酒の樽数・艘数、味醂<sup>17)</sup>樽数が記載されており、酒荷輸送の内容については表1、表2のように整理できる。まず、表1では出帆地別に江戸入津樽数の推移を整理した。ここから上方からの入津樽数は安政期頃までは安政4年に最多の99万樽を記録するなど比較的多いが、それ以降は減少傾向に転じ、特に慶応2年以降は50万樽を大きく下回っていたことがわかる。同史料では十二郷の内訳は判明しないが、柚木が述べているように灘・伊丹の出荷樽数の減少が西宮・今津の増加分を上回り、全体として上方酒造業は失速していったと考えられる。一方で尾張国などから出荷される中国酒は次第にその数を増し、安政3年に10万樽を超えると、明治元年には上方を上回る入津樽数<sup>18)</sup>を記録する等、上方酒造業とは対照的な状況となっている。

表1 幕末維新时期江戸入津樽数表（「江戸月々入津高書抜帳」、「東京月々入津高書抜帳」より筆者作成）

| 年    | 弘化3     | 弘化4     | 嘉永元     | 嘉永2     | 嘉永3     | 嘉永4     | 嘉永5     | 嘉永6     | 安政元     |
|------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 上方樽数 | 806,401 | 833,179 | 815,470 | 753,926 | 648,034 | 610,165 | 895,215 | 790,931 | 672,706 |
| 中国樽数 | 70,006  | 79,317  | 93,676  | 80,143  | 79,980  | 46,066  | 68,614  | 78,135  | 83,693  |
|      | 安政2     | 安政3     | 安政4     | 安政5     | 安政6     | 万延元     | 文久元     | 文久2     | 文久3     |
|      | 697,586 | 792,330 | 994,014 | 689,992 | 664,257 | 573,137 | 652,538 | 715,332 | 634,342 |
|      | 98,934  | 118,152 | 125,691 | 77,860  | 99,134  | 157,986 | 172,193 | 190,020 | 170,534 |
|      | 元治元     | 慶応元     | 慶応2     | 慶応3     | 明治元     | 明治2     | 明治3     | 明治4     |         |
|      | 689,168 | 608,541 | 387,290 | 402,775 | 310,758 | 365,221 | 239,625 | 399,649 |         |
|      | 214,008 | 301,854 | 243,732 | 230,024 | 399,353 | 306,577 | 229,046 | 271,766 |         |

表2 幕末維新时期江戸入津艘数表（「江戸月々入津高書抜帳」、「東京月々入津高書抜帳」より筆者作成）

| 年    | 弘化3 | 弘化4 | 嘉永元 | 嘉永2 | 嘉永3 | 嘉永4 | 嘉永5 | 嘉永6 | 安政元 |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 上方出帆 | 534 | 556 | 549 | 511 | 434 | 438 | 542 | 410 | 332 |
| 中国出帆 | 266 | 301 | 336 | 302 | 275 | 250 | 324 | 309 | 313 |
|      | 安政2 | 安政3 | 安政4 | 安政5 | 安政6 | 万延元 | 文久元 | 文久2 | 文久3 |
|      | 334 | 352 | 446 | 292 | 295 | 232 | 260 | 268 | 220 |
|      | 302 | 379 | 411 | 270 | 306 | 355 | 354 | 329 | 289 |
|      | 元治元 | 慶応元 | 慶応2 | 慶応3 | 明治元 | 明治2 | 明治3 | 明治4 |     |
|      | 245 | 226 | 142 | 151 | 113 | 125 | 87  | 139 |     |
|      | 309 | 359 | 271 | 329 | 382 | 299 | 230 | 273 |     |

次に、同史料から入津艘数の動向について見ていきたい。従来幕末期に稼働していた樽廻船の個体数の推移については柚木による「樽廻船名前帳」<sup>19)</sup>の分析で明らかにされているが、樽廻船の江戸入津艘数については示されておらず、年別の入津艘数をまとめた表2は、江戸・上方間の酒荷輸送の実態をより鮮明に示すことができる。上方出帆の江戸入津艘数推移を見ると、入津艘数は樽数同様に減少傾向にあったことがわかる。しかも、入津艘数の減少傾向は樽数よりも顕著と言える。このことから、幕末期には上方からの入津樽数が減少しているとは言え、積荷需要に対して輸送能力が不足する荷糶現象の高まりが生じていた可能性がある。こうした状況は特に幕末期に出荷量を伸ばそうとしていた西宮・今津の酒造家に対して、輸送手段の確保を目的とした廻船事業への投資を促したと考えられる。また、中国出帆の入津艘数は入津樽数が大幅に増加しているにも関わらず年間300

<sup>17)</sup> 酒造家の中には清酒の他に味醂を生産していた酒造家もいたことから、酒樽以外に味醂樽数も表記が見られる。

<sup>18)</sup> 篠田壽夫「尾張国知多郡酒造業と尾張藩の財政政策」(『酒史研究』第4号、1986年)7~8頁 中国酒の躍進の要因について、知多郡の酒造家が廻船を経営内に取り込んだ点と、品質が向上したことで上方酒に似せた樽印で出荷し、江戸で上方酒に代用された点に求めている。

<sup>19)</sup> 前掲注4) 124~126・131~137頁、原本は、関西学院大学図書館収蔵魚崎酒造組合文書「樽廻船名前帳」(嘉永4、文久元・2、元治元、慶応3)

艘程度と横ばいで、上方の樽廻船と中国出帆船の性格の違いを考慮に入れなければならないが、こちらも荷糶現象が高まっている可能性が十分考えられる。

## 2. 2 西宮の酒造業と辰屋吉左衛門家

ここからは本稿で分析対象とする、西宮の酒造家辰屋吉左衛門家の動向について確認しておきたい。既に述べたように灘・伊丹とは対照的に西宮は幕末期に江戸への出荷量を増加させていた。この幕末期の西宮で頭角を現したのが辰屋吉左衛門家である。近世前期から続く同家の酒造業の全貌は史料的制約<sup>20)</sup>から明らかにし得ないが、天保6年以降明治に至るまでの動向を「荷物積附帳」<sup>21)</sup>を中心に辰馬本家文書から以下で考察する。

まず、酒蔵の保有数の変遷についてである。天保6年から天保11年までは本蔵<sup>22)</sup>のみで醸造を行っている。その後、天保12年、13年に西宮の酒造家小西甚兵衛より借蔵、弘化元年からは魚崎に酒蔵を所有して、2蔵体制となった。弘化4年に本蔵を焼失したが、翌年には再建、嘉永4年には今津に東店と呼ぶ蔵を所有し3蔵体制となった。さらに、慶応期には松店も所有し、4蔵体制で明治を迎えており、幕末期に生産体制の強化に取り組んだ姿勢が読み取れる。

次に、江戸下り酒問屋との取引の変遷についてである。天保6年から安政2年までは鹿島庄助のみの取引となっている。しかし、安政3年から中野幸太郎、安政5年に千代倉惣兵衛、万延元年に伊坂熊次郎、文久元年に小西宗兵衛と浦賀の尼屋喜太郎が加わった。但し、取引先の拡大が言ったとは言え、その取引量については鹿島庄助が圧倒的であった。画期となったのは鹿島庄助が休店に追い込まれ、主要取引先を喪失した文久元年である。その後、文久3年から新たな主要取引先として鹿島利右衛門と小西利右衛門の2家に多くの酒荷が送られるようになった。さらに元治元年に鹿島清兵衛と大和屋善兵衛、慶応元年に高橋門兵衛と坂上家、慶応2年に浦賀の宮原屋利兵衛との取引が始まって明治を迎えた。このような取引先の増加に応じて取り扱い銘柄も増加し、天保期以来の白鹿印のみではなく、問屋ごとに様々な銘柄で出荷されるように変化していった。

最後に廻船事業について確認する。まず、所有廻船については表3の通りである。安政4年以降に新造・買入を進め、延べ6艘の廻船を所有した。しかし、売却や破船による所有艘数の減少も見られ、同時運用していたのは元治元年から慶応元年にかけての4艘が最大である。積石数については不明な船もあるが、1,500石から1,800石となっており、当時の大型廻船を揃えていたと言える。さらに、建造費用については安政4年の辰吉丸しか判明しないが、代銀157貫余と高額<sup>23)</sup>である。もっとも辰吉丸に対しても他の酒造家などから出資があったが、経営上のリスクを負って所有していることに違いはないだろう。文久4年2月の中古船の取得<sup>24)</sup>については代銀35貫となっており、新造船と比べてかなり割安となっていた。

続いて、他の船主が所有する廻船への出資を行った廻船加入の状況は表4の通りである。

<sup>20)</sup> 弘化4年に辰屋吉左衛門家の本蔵が火災に遭い、それ以前の史料の多くが失われているため。

<sup>21)</sup> 白鹿記念酒造博物館所蔵辰馬本家文書 史料番号1607・1609～1613・1615・1617～1619「荷物積附帳」

<sup>22)</sup> 白鹿記念酒造博物館所蔵辰馬本家文書 未整理史料「譲り渡申證文之事」文政13年9月に丹波屋吉左衛門から酒造株・酒造蔵と付随する酒造道具一式を買入。辰馬本家酒造では本蔵と呼ばれる。

<sup>23)</sup> 前掲注3)七福丸の廻船加入証文には、1,800石積で152貫188匁とあり、他の廻船加入証文に見られる建造費用からも、銀150貫程度の建造費用が一般的に必要であった。

<sup>24)</sup> 白鹿記念酒造博物館所蔵辰馬本家文書 未整理史料「廻船売渡一札之事」井上仁兵衛より1,600石積廻船一艘を買入れている。この船名は記されていないが、同年より運用している辰力丸か辰宝丸の買入れと考えられる。

ここから、所有を始めた安政4年より以前の天保9年から加入が開始されていたことがわかる。また、加入の方式が安政4年を境に徳用配分型から年賦償還型へと移行している。出資金額については両類型とも1~2貫程度が多い。ただし、辰屋と関係の深い<sup>25)</sup>岸田屋所有廻船に対する金額は他と比べてかなり高額となっている。それでも新造船の建造や中古船の買入よりは安価であり、少額の出資によって手酒を積み込む船腹を確保したいという酒造家の姿勢を表していると言える。

表3 辰屋吉左衛門所有廻船一覧表（各船の廻船加入証文より筆者作成）

| 取得時期 | 船名  | 船頭  | 積石数   | 所属廻船問屋    | 費用（貫）     | 備考                            |
|------|-----|-----|-------|-----------|-----------|-------------------------------|
| 安政4年 | 辰吉丸 | 亀蔵  | 1,500 | 柴田正二郎     | 157.72233 | 万延元年遠州沖で破船→文久2年に修復→文久3年武州沖で破船 |
| 万延元年 | 辰悦丸 | 亀之助 | 1,600 | 辰権蔵／藤田伊兵衛 | 不明        |                               |
| 万延元年 | 喜悦丸 | 福太郎 | 1,800 | 毛馬屋五郎     | 不明        | 元治元年3月時点で材木屋甚助へ譲渡             |
| 文久2年 | 辰栄丸 | 亀十郎 | 1,650 | 柴田正二郎     | 不明        |                               |
| 元治元年 | 辰力丸 | 権十郎 | 不明    | 柴田正二郎     | 不明        | 慶応4年紀州沖で破船                    |
| 元治元年 | 辰宝丸 | 弥八  | 不明    | 柴田正二郎     | 不明        | 慶応2年志州沖で破船                    |

表4 辰屋吉左衛門加入廻船一覧表（各船の廻船加入証文より筆者作成）<sup>26)</sup>

| 加入時期    | 船主      | 船名  | 船頭  | 積石数   | 加入期間 | 出資額（貫）  | 積荷特約（駄） |
|---------|---------|-----|-----|-------|------|---------|---------|
| 天保9年5月  | 源中屋忠兵衛  | 神徳丸 | 金蔵  | 1,500 | 不明   | 2,21135 | 不明      |
| 天保14年6月 | 三砂屋善吉   | 福神丸 | 徳太郎 | 不明    | 不明   | 2,62545 | 不明      |
| 弘化3年10月 | 岸田屋平次郎  | 栄寶丸 | 繁蔵  | 1,600 | 不明   | 12.8    | 不明      |
| 嘉永3年8月  | 辰屋半右衛門  | 三社丸 | 辰之助 | 1,800 | 不明   | 1.125   | 不明      |
| 安政4年6月  | 八馬喜兵衛   | 浮亀丸 | 喜十郎 | 1,600 | 10年  | 1,33864 | 不明      |
| 安政4年9月  | 吉田亀之輔   | 相生丸 | 益十郎 | 1,740 | 10年  | 1.7     | 不明      |
| 安政7年3月  | 讃岐屋市兵衛  | 和光丸 | 常蔵  | 不明    | 10年  | 1       | 20      |
| 万延元年7月  | 柴屋興三兵衛  | 福栄丸 | 徳助  | 不明    | 10年  | 1       | 25      |
| 万延元年7月  | 藤田屋なか   | 七福丸 | 久次郎 | 1,800 | 10年  | 1       | 20      |
| 文久元年4月  | 角屋惣五郎   | 神力丸 | 秀之助 | 1,700 | 10年  | 1,527   | 不明      |
| 文久元年11月 | 日向屋善右衛門 | 正吉丸 | 常六  | 不明    | 9年   | 0.9     | あり      |
| 文久2年3月  | 四井屋久兵衛  | 伊尽丸 | 弥平  | 1,600 | 10年  | 1       | 不明      |
| 文久2年10月 | 四井屋信助   | 嘉悦丸 | 一二郎 | 1,700 | 10年  | 1       | 20      |

ここまで、辰屋吉左衛門家の動向を確認したが、西宮郷全体が幕末期にかけて発展したのと同様に、辰屋もまた発展していった様子が窺える。特徴的な点は、下り酒問屋との取引が鹿島庄助一手から他の酒問屋へと拡大している点で、柚木が魚崎・御影・今津郷を事例に示した「天保期以降における問屋の荷主系列化」<sup>27)</sup>と対照的である。こうした江戸市場での販売力強化と酒蔵の取得による生産体制の強化、それらを結びつける輸送体制の整備にも積極的に投資を行うことで、辰屋は成長を遂げたと考えられる。

### 3. 江戸積酒荷の積荷動向と廻船運用

#### 3. 1 辰屋吉左衛門家の酒荷江戸積と廻船事業

ここでは「荷物積附帳」<sup>28)</sup>についてさらに分析を深めていきたい。上方出帆日・江戸入

<sup>25)</sup> 矢野孝之輔『第十三代辰馬吉左衛門翁を顧みて』（1975年）22～23頁 安政2年に当主となった十一代辰屋吉左衛門は、嘉永5年に伝法の酒造家岸田屋惣右衛門の長女たきと婚姻。両家は協力関係にあったと考えられる。

<sup>26)</sup> 辰屋吉左衛門家の加入廻船は表に記載した以外にも存在するが、加入時期や条件が不明であるため本表からは除外した。また、前掲注21)には、表4で挙げた廻船以外の船に「手船」との記載がある。この「手船」は本来所有廻船を指すが、栄寶丸のように出資額が高額な岸田屋系廻船にも「手船」との表記をしていると見られる。

<sup>27)</sup> 前掲注1) 321～326頁

<sup>28)</sup> 前掲注21)

津日・銘柄・駄数<sup>29)</sup>・廻船問屋・船頭名といった、辰屋の酒荷を積んだ樽廻船の情報が記されている同史料は、柚木や上村が分析した「一紙帳」<sup>30)</sup>が郷別の酒の積荷動向を知ることができるのに対して、酒造家個別の積荷動向を分析するのに適している。そこで、以下では幕末期における辰屋吉左衛門家の江戸積酒造業を、第一期：本蔵・廻船非所有期（天保6年～天保12年）、第二期：複数蔵・廻船非所有期（天保13年～安政3年）、第三期：複数蔵・廻船所有期（安政4年～慶応3年）に分けて積荷動向を分析する。具体的には、新酒番船<sup>31)</sup>から古酒積切<sup>32)</sup>までの年間の出荷樽数と、樽廻船の利用回数を表した出荷機会数の推移、船別の積込樽数の分布と年間出荷樽数における加入・所有廻船への積込樽数の割合について示すことで、各期の積荷動向・廻船の利用実態を明らかにする。

(1) 第一期：本蔵・廻船非所有期（天保6年～天保12年）

第一期の江戸積出荷樽数<sup>33)</sup>と樽廻船を利用した出荷機会数の推移は表5の通りである。天保8年、10年に落ち込みは見られるが、概ね1,500～2,000樽程度の出荷樽数となっている。また、出荷機会については樽数の推移と連動して増減はあるが、概ね100回を少し上回る水準となっている。これとは別に、同史料から判明する利用した廻船種数<sup>34)</sup>については7年間の平均が40艘程度で一定している。また、船別の利用頻度は多い船で5～6回/年であるが、1～2回/年の利用が最も多い比率を占めている。

表5 第一期江戸積樽数、出荷機会数推移表（「荷物積附帳」より筆者作成）

| 年    | 天保6年  | 天保7年  | 天保8年 | 天保9年  | 天保10年 | 天保11年 | 天保12年 |
|------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|
| 出荷樽数 | 1,714 | 1,755 | 682  | 1,660 | 1,174 | 1,887 | 2,000 |
| 出荷機会 | 127   | 124   | 49   | 99    | 68    | 115   | 124   |

表6 第一期船別積込樽数分布、加入廻船積込比率表（「荷物積附帳」より作成）

| 船別積込樽数 | 1-9 | 10-19 | 20-29 | 30-39 | 40-49 | 50-59 | 加入廻船積込比率 |
|--------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|----------|
| 天保6年   | 0%  | 68%   | 31%   | 2%    | 0%    | 0%    | なし       |
| 天保7年   | 0%  | 69%   | 23%   | 8%    | 1%    | 0%    | なし       |
| 天保8年   | 4%  | 65%   | 24%   | 6%    | 0%    | 0%    | なし       |
| 天保9年   | 0%  | 48%   | 41%   | 4%    | 6%    | 0%    | 6%       |
| 天保10年  | 0%  | 43%   | 44%   | 12%   | 1%    | 0%    | 4%       |
| 天保11年  | 1%  | 46%   | 47%   | 4%    | 2%    | 1%    | 5%       |
| 天保12年  | 0%  | 49%   | 43%   | 6%    | 2%    | 0%    | 4%       |

次に、船別の辰屋酒荷の積込樽数の分布と加入廻船への積込比率は表6の通りである。まず廻船一艘あたりの積込樽数について見ると、10～29樽の船が9割近くに上っており、最大でも50樽程度までである。幕末期の樽廻船が2,000～3,000樽程度は積み込むことができる<sup>35)</sup>ことから、一艘あたりの辰屋酒荷の積荷占有率は非常に低い状態にあったと言える。このことは、この時期の辰屋による廻船事業への投資の少なさに起因している。つまり、この時期の辰屋は廻船を所有しておらず、他の船主が所有する廻船への出資も少なく、辰屋の酒荷の多くは全く出資関係に無い樽廻船へと積み込まれていた。そのため、一艘あ

<sup>29)</sup> 酒荷陸送の際に、馬の背に2樽を積んだため2樽を1単位とした「駄」という単位が用いられるようになった。1樽の場合は「片馬」と表記される。例えば10樽は5駄、11樽は5駄片馬と表記される。

<sup>30)</sup> 前掲注6)

<sup>31)</sup> 新酒番船は元来その年に最初に出来た新酒を、大坂・西宮から一斉に出発して順位を競う番船競争のこと。当初は秋頃であったが、生産自体が冬季の寒造りに集約されたこともあり、幕末期には年始頃に催された。

<sup>32)</sup> 出荷を始める新酒番船に対して、酒を江戸へ送る期限のことを古酒積切と呼び、幕末期には概ね11～12月に設定された。

<sup>33)</sup> 上方から出荷した樽数。ただし、海難事故等が発生した場合、江戸へ入津した樽数はここに示した出荷数よりも減少する。

<sup>34)</sup> 前掲注19) 当時運航していた80艘程度の樽廻船の内どの程度の船数を利用していたのかを、廻船種数として示す。例えば辰吉丸・辰悦丸・喜悦丸を利用した場合3艘となる。

<sup>35)</sup> 例えば、白鹿記念酒造博物館所蔵辰馬本家文書 史料番号旧6878「辰悦丸仕切目録控」では、慶応元年四月建てで1,715太(=3,430樽)が積み込まれている。

たりの積込樽数は低く抑えられたのである。一方で、天保9年以降は他の船主が所有する廻船への出資を開始し、その加入廻船への積込樽数の内訳は、天保9年～12年で50樽=1回、40樽=1回、30樽=4回、20樽=4回と、出資関係に無い廻船と比べて多く積まれる傾向が見られる。このことから、廻船への出資は一艘あたりの積込樽数を増加させる効果を持つものと理解できる。

この第一期は本蔵で生産された分の出荷量に過ぎないため、一艘あたりの積荷占有率が低い出資関係に無い樽廻船への積込みで対応していた。しかし、天保9年からは廻船への出資を始め、出荷樽数を増加させようとする姿勢を窺うことができる。

## (2) 第二期：複数蔵・廻船非所有期（天保13年～安政3年）

続いて借蔵や魚崎と今津に酒蔵を所有することにより、生産量が増加した第二期の江戸積出荷樽数と出荷機会数の推移は表7の通りである。弘化元年、嘉永元年の出荷樽数は一時的に1蔵分の出荷となったため減少している。また、嘉永6年および翌安政元年の2度のペリー来航にも出荷樽数は影響を受けている。鹿島庄助から辰屋吉左衛門宛の書状には、「当十一日夜アメリカ船乗込候而、追々大船七艘ニ相成、中二者九十間餘有之大船茂御座候、いまた跡船六七十艘も入津可仕様も種々風聞仕候、駈と者相分り不申候得共市中一統心配仕何分陰気、引立兼甚心咳奉存候」<sup>36)</sup>とあり、安政元年の出荷樽数の減少は、江戸の混乱から清酒需要が低下したことが要因と考えられる。この影響は一時的なもので、ペリーが去った後には回復した。反対に嘉永5年からは3蔵分の出荷となり、江戸積樽数は7～8千樽へと増加した。

出荷機会数については、嘉永4年までは出荷樽数が第一期と比べて倍増しているにも関わらず同水準であった。そして、3蔵分の出荷となった嘉永5年以降に200回程度に水準が上がっている。

表7 第二期江戸積樽数、出荷機会数推移表（「荷物積附帳」より筆者作成）

| 年    | 天保13  | 天保14  | 弘化元   | 弘化2   | 弘化3   | 弘化4   | 嘉永元   | 嘉永2   |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 出荷樽数 | 4,318 | 4,406 | 2,132 | 4,667 | 3,944 | 4,365 | 2,329 | 5,211 |
| 出荷機会 | 123   | 113   | 79    | 118   | 112   | 98    | 53    | 161   |
|      | 嘉永3   | 嘉永4   | 嘉永5   | 嘉永6   | 安政元   | 安政2   | 安政3   |       |
|      | 4,873 | 4,075 | 7,619 | 8,136 | 6,651 | 8,024 | 8,206 |       |
|      | 126   | 140   | 202   | 210   | 151   | 184   | 162   |       |

また、第二期に利用した廻船種数は、15年間を平均して67艘と第一期から増加している。特に嘉永2年以降はペリー来航の影響を受けた安政元年を除いて平均値を上回っており、多くの船を要したことがわかる。こうした利用廻船種数の増加は、積荷を預ける廻船問屋の顔触れの変化をも伴っていた。第一期は主に西宮の廻船問屋（塩屋・万屋・枅屋・藤田）と一部大坂廻船問屋（小西）であったのに対し、この時期からはこれまでの廻船問屋に加え、多くの大坂廻船問屋（柴田・毛馬屋・木屋・吉田・西田）との取引が新たに始まっている。船別の利用頻度については、多い船で10回/年を数える船もあるが、多くの船は1～2回/年の利用に止まっており、偏りが第一期よりも顕著に見られる。

次に、船別積込樽数の分布と加入廻船への積込比率は表8の通りである。船別積込樽数の分布について見ると、第一期には10～29樽の船が90%程度であったのに対し46～72%

<sup>36)</sup> 白鹿記念酒造博物館所蔵辰馬本家文書 史料番号2574〔書状〕

と減少している。対照的に 100 樽以上積み込む船が年によっては 10% を超え、第一期と比べて一艘あたりの辰屋酒荷の積荷占有率が高まっている。このことは廻船への投資拡大が関係している。第一期よりも辰屋が出資した廻船である加入廻船数が増加し、加入廻船積込比率は第一期が 5% 程度であったのに対し、天保 14 年以降は 15～48% と比率が高まっている。特に加入廻船の中でも出資額が高額であった岸田屋所有廻船への加入を契機に比率の高まりが顕著に見られ、出資額の大小も積込樽数に影響していたと考えられる。

この第二期は、第一期と比較して出荷量が 2～3 倍に増加した。これに伴って出荷機会数と利用廻船種数を増やし、さらに廻船への出資を強化して一艘あたりの積込樽数を増加させて対応していたものと考えられる。

表 8 第二期船別積込樽数分布、加入廻船積込比率表（「荷物積附帳」より筆者作成）

| 船別積込樽数  | 1-9 | 10-19 | 20-29 | 30-39 | 40-49 | 50-59 | 60-69 | 70-79 | 80-89 | 90-99 | 100以上 | 加入廻船積込比率 |
|---------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----------|
| 天保 13 年 | 0%  | 9%    | 39%   | 15%   | 17%   | 2%    | 7%    | 0%    | 6%    | 0%    | 5%    | 2%       |
| 天保 14 年 | 0%  | 4%    | 47%   | 9%    | 18%   | 2%    | 8%    | 1%    | 4%    | 0%    | 8%    | 18%      |
| 弘化元年    | 0%  | 23%   | 46%   | 10%   | 9%    | 0%    | 9%    | 0%    | 1%    | 0%    | 3%    | 24%      |
| 弘化 2 年  | 0%  | 4%    | 47%   | 10%   | 17%   | 4%    | 2%    | 0%    | 4%    | 1%    | 10%   | 18%      |
| 弘化 3 年  | 0%  | 21%   | 48%   | 6%    | 4%    | 0%    | 4%    | 1%    | 5%    | 1%    | 9%    | 31%      |
| 弘化 4 年  | 1%  | 8%    | 46%   | 5%    | 10%   | 1%    | 8%    | 2%    | 5%    | 1%    | 12%   | 28%      |
| 嘉永元年    | 0%  | 19%   | 43%   | 0%    | 13%   | 0%    | 6%    | 0%    | 4%    | 0%    | 15%   | 48%      |
| 嘉永 2 年  | 0%  | 9%    | 57%   | 4%    | 14%   | 0%    | 6%    | 0%    | 4%    | 0%    | 5%    | 19%      |
| 嘉永 3 年  | 0%  | 12%   | 46%   | 6%    | 13%   | 2%    | 6%    | 0%    | 7%    | 1%    | 8%    | 23%      |
| 嘉永 4 年  | 0%  | 11%   | 61%   | 1%    | 17%   | 1%    | 6%    | 0%    | 0%    | 0%    | 4%    | 15%      |
| 嘉永 5 年  | 0%  | 3%    | 55%   | 5%    | 17%   | 0%    | 5%    | 0%    | 7%    | 0%    | 6%    | 23%      |
| 嘉永 6 年  | 0%  | 12%   | 49%   | 8%    | 11%   | 2%    | 8%    | 0%    | 4%    | 0%    | 6%    | 29%      |
| 安政元年    | 0%  | 11%   | 48%   | 5%    | 19%   | 2%    | 3%    | 1%    | 2%    | 1%    | 9%    | 35%      |
| 安政 2 年  | 0%  | 5%    | 53%   | 8%    | 16%   | 1%    | 8%    | 0%    | 1%    | 0%    | 9%    | 34%      |
| 安政 3 年  | 0%  | 9%    | 27%   | 17%   | 22%   | 2%    | 9%    | 1%    | 4%    | 2%    | 8%    | 30%      |

### （3）第三期：複数蔵・廻船所有期（安政 4 年～慶応 3 年）

続いて第三期の出荷樽数と出荷機会数の推移は表 9 の通りである。出荷樽数の推移で特徴的なのは、文久元・2 年の大幅な減少である。鹿島庄助の書状には「近年来種々之天災折重り、別而震災ニ而者売先キざき之店々家蔵共丸潰候俣丸焼ニ相成候仁数多有之、猶亦度々の大火ニ而も矢張同様之姿ニ成行、別而拙店永代橋大川寄ニ候間、本所深川小梅浅艸丸潰之場所取引多、酒代金三百兩五六百兩宛之貸込有之候も、無跡形成行候も追々出来当惑心痛仕候、無左候も暦々之売先追々零落仕候様之時節、滞金仰山ニ相嵩何様ニも取集不申甚難渋仕候、旧来御熱情被成下候義者千万難有甚歎息仕候へ共、何分ニも右之時節今度無拋休店仕候間、御荷物御送り方被下候義者御差扣へ可被下候様奉願候」<sup>37)</sup>とあり、安政 2 年の江戸地震や、それに続く火災により鹿島庄助の取引先が損害を受け、売掛金回収がままならず、休店へ追い込まれたことがわかる。こうした辰屋の主要取引先の喪失により、大幅な出荷樽数の減少となったが、文久 3 年からは鹿島利右衛門と小西利右衛門との取引が始まり、出荷樽数の水準は回復、慶応元年には初めて 1 万樽を超えた。

さらに注目すべきは、出荷機会数の推移である。出荷樽数の推移は一時的に起きた大幅な減少を除けば、横ばいから増加であったにも関わらず、出荷機会数は第二期よりも減少しており、特に鹿島庄助休店後の文久元年以降は 100 回を超えることは無かった。利用廻船種数についても、安政 4 年～万延元年は 71～83 種類と多いが、文久元年～慶応 3 年は

<sup>37)</sup> 白鹿記念酒造博物館所蔵辰馬本家文書 史料番号 2743〔書状〕 尚、踊り字は仮名に直して掲載した。

23～41 種類と大きく減少した。船別の利用頻度については、多い船で 5～6 回／年程度とこちらも減少している。また、1～2 回／年限りの利用が最も多いことに変わりはないが、その利用回数自体が大幅に減少した。

表 9 第三期江戸積樽数、出荷機会数推移表（「荷物積附帳」より筆者作成）

| 年    | 安政 4  | 安政 5  | 安政 6  | 万延元   | 文久元   | 文久 2  | 文久 3  | 元治元   | 慶応元    | 慶応 2  | 慶応 3  |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|
| 出荷樽数 | 8,473 | 7,776 | 5,030 | 7,695 | 1,644 | 1,513 | 7,964 | 9,069 | 10,950 | 8,298 | 6,356 |
| 出荷機会 | 138   | 103   | 99    | 124   | 34    | 37    | 61    | 76    | 67     | 76    | 69    |

次に、船別の積込樽数の分布と所有廻船への積込比率、加入・所有という出資関係にある両廻船への積込比率は表 10 の通りである。船別積込樽数の分布を見ると、第一期と第二期に多くを占めた 10～29 樽積の船の減少が顕著である。対照的に 100 樽以上積んだ船の割合が高まり、文久 3 年以降は 30% を超える高い比率を示している。こうした現象は、第二期よりもさらに廻船への投資が拡大していることが要因として考えられる。表 3 で確認したように安政 4 年から辰屋は廻船の所有に踏み切った。表 10 の所有廻船積込比率を見ると、廻船を複数所有した文久 2 年頃からは 50% 近くを所有廻船へ積込んでいたことがわかる。出資関係にある加入廻船への積込比率を加えた加入・所有廻船積込比率をみると積込比率はさらに高まり、最も高い慶応元年には 86% となった。

この第三期は、主要取引先を喪失した一時期を除けば、出荷樽数を伸ばしている。しかし、第二期に出荷機会数と利用廻船種数の増加で対応していたのと異なり、廻船の所有や出資する加入廻船を増やすことにより、一艘あたりの積込樽数を増やすことで対応している点に特徴がある。特に文久 2 年以降にこの傾向が顕著にみられ、辰屋の廻船投資の方針に変化があったと考えられる。

表 10 第三期船別積込樽数分布、加入・所有廻船積込比率表（「荷物積附帳」より筆者作成）

| 船別積込樽数 | 1-9 | 10-19 | 20-29 | 30-39 | 40-49 | 50-59 | 60-69 | 70-79 | 80-89 | 90-99 | 100 以上 | 所有廻船積込比率 | 加入・所有廻船積込比率 |
|--------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|----------|-------------|
| 安政 4 年 | 0%  | 8%    | 17%   | 7%    | 35%   | 3%    | 12%   | 1%    | 4%    | 1%    | 13%    | 7%       | 23%         |
| 安政 5 年 | 1%  | 8%    | 17%   | 8%    | 26%   | 2%    | 9%    | 2%    | 1%    | 1%    | 26%    | 19%      | 33%         |
| 安政 6 年 | 0%  | 8%    | 36%   | 12%   | 20%   | 0%    | 5%    | 2%    | 4%    | 1%    | 11%    | 28%      | 48%         |
| 万延元年   | 1%  | 12%   | 26%   | 4%    | 20%   | 6%    | 10%   | 0%    | 3%    | 0%    | 18%    | 19%      | 49%         |
| 文久元年   | 0%  | 15%   | 21%   | 9%    | 15%   | 6%    | 12%   | 3%    | 9%    | 0%    | 12%    | 29%      | 51%         |
| 文久 2 年 | 0%  | 11%   | 32%   | 0%    | 32%   | 11%   | 0%    | 3%    | 0%    | 0%    | 11%    | 47%      | 58%         |
| 文久 3 年 | 0%  | 0%    | 10%   | 0%    | 21%   | 5%    | 15%   | 3%    | 15%   | 0%    | 31%    | 52%      | 78%         |
| 元治元年   | 0%  | 1%    | 9%    | 5%    | 19%   | 3%    | 12%   | 1%    | 13%   | 0%    | 36%    | 54%      | 71%         |
| 慶応元年   | 0%  | 1%    | 12%   | 1%    | 15%   | 1%    | 7%    | 1%    | 3%    | 1%    | 55%    | 53%      | 86%         |
| 慶応 2 年 | 0%  | 3%    | 14%   | 8%    | 18%   | 3%    | 13%   | 1%    | 5%    | 0%    | 34%    | 49%      | 75%         |
| 慶応 3 年 | 0%  | 4%    | 17%   | 7%    | 13%   | 6%    | 9%    | 4%    | 14%   | 0%    | 25%    | 27%      | 60%         |

以上、天保 6 年～慶応 3 年にかけての積荷動向を 3 期に分けて分析した。出荷樽数の推移について全期間を通して言えば、本蔵の火災やペリー来航、安政地震などの災害に伴う取引先の休店といった要因で一時的に減少する年も見られるが増加傾向にあったと言える。このように蔵の増加といった生産体制の拡張は江戸積樽数の増加に直結しており、また直結させるために廻船事業に投資されたとみられる。実際に、江戸積に利用した廻船は、出資関係に無い廻船から出資関係を結んだ他の船主が所有する加入廻船、最終的には所有廻船と加入廻船へと、出荷樽数の増加に合わせて移行していったのである。

### 3. 2 江戸市場の動向と所有廻船の運用

ここでは所有廻船の運用について、消費地である江戸の酒荷需要の増減にどのように対応していたのかについて考察する。まず従来指摘のある酒荷需要の季節性<sup>38)</sup>について、再び「江戸月々入津高書抜帳」、「東京月々入津高書抜帳」から考察する。弘化3年から明治4年までの26年間の月別の平均江戸入津艘数は表11の通りである。最も多くの船が入津していたのは10月であり、9月～11月にかけては比較的多くの船が入津していることがわかる。また、一年間に最も多くの船が入津した月を合算した「最多入津月」でも、26年間で15回と10月が圧倒的に多く酒荷輸送が秋に集中しているのは明らかである。秋以外の月では、4月から6月にかけて艘数が多くなっていることも読み取れる。

表11 幕末期月別平均江戸入津艘数（「江戸月々入津高書抜帳」、「東京月々入津高書抜帳」より筆者作成）

| 月      | 1月   | 2月   | 3月   | 4月   | 5月   | 6月   | 7月   | 8月   | 9月   | 10月  | 11月  | 12月  | 閏月   |
|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 平均入津艘数 | 12.9 | 14.3 | 18.7 | 27.0 | 26.5 | 31.7 | 20.0 | 20.6 | 33.7 | 47.0 | 36.0 | 20.4 | 18.9 |
| 最多入津月  |      |      |      |      |      | 1    |      |      | 4    | 15   | 4    | 1    | 1    |
| 最少入津月  | 6    | 8    | 4    | 2    |      |      | 6    | 2    |      |      |      | 2    |      |

こうした入津艘数が秋に偏る傾向は、古酒積切と呼ばれる決められた日程までに江戸へ出荷しなければならないという、下り酒固有の商習慣が関係している。古酒積切日は、幕末期には主として年末頃<sup>39)</sup>に設定されることが多く、この日程に間に合うように10月前後に集中していたと考えられる。

しかし、これ以外にも江戸市場固有の要因により酒荷輸送が季節的な偏りを持った可能性がある。例えば、鹿島庄助から辰屋吉左衛門宛の書状には「追々世上陽気立可申、殊ニ当来月者神田御祭禮年ニ候間酒拔群之捌増可有之奉存候」<sup>40)</sup>、小西宗兵衛からの書状には「所々祇園會続而山王御祭礼旁一段捌出可申候」<sup>41)</sup>とあり、この他にも祭礼に関する記述は下り酒問屋からの書状にしばしば見られる。前者は隔年で9月に開催されていた神田祭礼についてであり、後者は6月に行われる祇園会と日枝山王社の祭礼についてである<sup>42)</sup>。つまり、祭礼時に江戸市中の景気が上向き、酒の販売が好調になるという予想を立て、下り酒問屋が荷主に知らせていたのである。こうした定期的な祭礼に合わせて酒の販売が上向くという予想が下り酒問屋の共通認識であったならば、廻船入津時期の偏りの一因となったとも考えられる。

続いて安政4年以降、辰屋が所有した6艘の運用について検討する。酒荷輸送に就いていた時期については表12の通りである。ここでも、表11同様に9～11月に偏りが見られる。また、早春の新酒番船以降6月の祭礼時期までに比較的多く江戸へ向けて出帆している様子も見られ、12月～3月の出帆は少ない。

<sup>38)</sup> 前掲注7) 417頁

<sup>39)</sup> 前掲注1) 270頁 当該期の古酒積切月日が判明するのは、安政6年11月25日・慶応3年12月11日。

<sup>40)</sup> 白鹿記念酒造博物館所蔵辰馬本家文書 史料番号2712〔書状〕

<sup>41)</sup> 白鹿記念酒造博物館所蔵辰馬本家文書 史料番号2454〔書状〕

<sup>42)</sup> 山王祭礼と神田祭礼は隔年で交互に開催される。

表 12 辰屋所有廻船酒荷輸送状況表（「荷物積附帳」より筆者作成）

| 年\月 | 1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 閏月 | 合計 | 所有廻船数 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|-------|
| 安政4 |    |    |    |    |    |    |    |    |    | 1   | 1   |     |    | 2  | 1     |
| 安政5 |    |    | 1  |    |    | 1  |    | 1  |    | 1   | 1   |     |    | 5  | 1     |
| 安政6 |    |    |    | 1  |    | 1  | 1  |    | 1  |     | 1   |     |    | 5  | 1     |
| 万延元 |    |    | 1  | 1  |    |    |    |    | 1  | 1   | 2   | 2   | 1  | 9  | 2     |
| 文久元 |    |    |    | 1  |    | 1  | 2  |    | 2  |     | 1   |     |    | 7  | 3     |
| 文久2 |    |    | 2  | 1  | 3  |    | 1  |    | 1  |     | 1   |     | 1  | 10 | 3     |
| 文久3 | 1  |    | 1  | 1  | 1  | 1  |    | 2  | 1  | 2   | 1   |     |    | 11 | 3     |
| 元治元 |    | 3  | 1  | 2  |    |    | 1  |    | 3  |     | 3   | 1   |    | 14 | 4     |
| 慶応元 |    | 1  |    |    | 3  | 2  |    | 2  | 2  | 2   | 1   | 2   | 1  | 16 | 4     |
| 慶応2 | 1  | 1  |    | 2  | 1  |    | 3  |    | 2  | 1   | 1   | 1   |    | 13 | 3     |
| 慶応3 |    |    |    | 2  |    | 1  | 1  | 1  | 2  |     |     |     |    | 7  | 3     |
| 合計  | 2  | 5  | 6  | 11 | 8  | 7  | 9  | 6  | 15 | 8   | 13  | 6   | 3  | 99 |       |

次に、酒荷輸送以外の運用についても触れておきたい。樽廻船の運用が酒荷輸送に止まらないことは既に明らかにされており<sup>43)</sup>、辰屋所有の廻船も幕府御城米輸送や大名・商人荷物の輸送に従事している。辰吉丸を事例にその一端を示せば、安政4年11月高砂積、安政6年2月金岡積、文久元年12月高砂積、文久3年2月今町積（以上御城米輸送）、同年7月奥州石巻積（南部藩荷物）と、江戸・上方間の航路に限らず運航している。そして、いずれも酒荷輸送繁忙期以外に稼働している様子が窺える。このことは辰吉丸に限らず他の所有廻船でも同様の傾向が見られる。また、こういった運賃積に際して辰屋所有廻船では、辰吉丸（文久3年7月武州沖で破船）・辰宝丸（慶応2年正月志州沖で破船）・辰力丸（慶応4年6月紀州沖で破船）が事故に遭っている。こうした酒荷輸送以外の運用は台風等嵐が起る夏期や海が荒れる冬期<sup>44)</sup>に行われたため、酒荷輸送時よりも破船のリスクを負った運用となっていた。

#### 4. おわりに

ここまで西宮の酒造家辰屋吉左衛門家の史料から、酒造家による廻船事業について分析した。まず、幕末期の酒荷輸送の全体像を把握するために、江戸入津樽数と入津艘数の推移を分析した。その結果、入津樽数・艘数ともに減少傾向にあり、特に艘数には顕著な減少が見られた。このことから、幕末期には荷糶現象の高まりが生じ、廻船事業への投資を酒造家に促す環境が醸成されていたことを指摘した。もっとも、こうした幕末期の荷糶現象の高まりの有無については議論があり<sup>45)</sup>、本稿で検討した要素のほかに一艘あたりの積載能力がどの程度拡張されたのかについても考慮すべきである。このことについて、表3、表4で示した数少ない事例から言えば、1,500～1,800石の範囲に収まっており、幕末期の範囲の中では大幅な拡張は確認できないことから、本稿では荷糶現象の高まりが起こっていたという立場で分析を進めた。

こうした酒荷輸送の全体像を踏まえた上で、「荷物積附帳」から辰屋吉左衛門家の廻船事業について、出荷樽数、出荷機会数、樽廻船一艘あたりにどの程度の辰屋酒荷が積込まれていたのかを示すために船別積込樽数分布、加入・所有といった出資関係にある廻船への

<sup>43)</sup> 前掲注1) 232～236頁

<sup>44)</sup> 石井謙治『ものと人間の文化史 和船Ⅰ』（法政大学出版局、1995年）347～349頁、近世廻船の漂流発生時期が冬季に集中、次いで6～8月に発生したと指摘。

<sup>45)</sup> 前掲注5) 58頁

積込比率を明らかにした。これらの数値の推移から、出荷量が少なく出資関係に無い廻船に多くを積み込んでいた段階（第一期）、生産設備を拡大させて増産した酒荷を江戸市場へ直結させるため、出荷機会数と利用廻船種数を増加させ、さらに一艘あたりの積込樽数を増加させるために廻船への出資を拡大させた段階（第二期）、第二期とは対照的に出荷機会数・利用廻船種数を絞り、廻船の所有や他廻船への出資など廻船事業へ積極的に投資して対応した段階（第三期）があり、出荷樽数の増加に応じて廻船事業に対する投資を段階的に進めていた姿が明らかになった。

続いて、酒造家が廻船所有の動機をより明確にするために、その運用について考察した。樽廻船による酒荷輸送は、一般的に秋に増加する傾向があり、辰屋所有の廻船にも同様の傾向が見られた。この他、6 月前に増加することについて、江戸で定期的に開催される祭礼に伴う景気浮揚が関係している可能性を指摘した。一艘あたりの積込樽数を増加させることは、こうした商機への対応をも容易にさせ、酒造家の廻船事業への投資の目的のひとつになっていたと考えられる。ただし、江戸での酒価との対応関係を示すことができなかつた点については今後の課題としたい。また、酒荷以外の運賃積は、酒荷輸送繁忙期以外に対応しており、あくまでも酒造家の廻船所有の動機は酒荷輸送にあったと見られる。

最後に、本稿での分析結果から酒造家の廻船所有の動機について考えたい。先行研究の中で柚木は「手酒の有利な積荷を狙った」<sup>46)</sup> 点にその動機を求める一方で、「酒造家が自ら船主となるのは、それによって手酒を手船へ積み込んで迅速に江戸へ運送するためでもなく、また単に運賃稼ぎをして収益をあげるのが目的でもなく、商品流通における大量の酒荷を迅速に運送することにより、酒荷の江戸市場での需給の調整をはかり、販売の主導権を荷主側で掌握するため」<sup>47)</sup> と述べている。後者の記述については、単に酒荷輸送の問題だけでなく江戸積酒造家と下り酒問屋との関係を含めて考えなければならない。まず、柚木は魚崎郷等の酒造家と下り酒問屋との関係について「特定問屋との密接な取引関係を締結し、問屋を通しての市場開拓を意図している」<sup>48)</sup> と指摘している。一方本稿で検討した辰屋の事例では、柚木の示した事例とは対照的に幕末期にかけて取引する下り酒問屋の数を増加させ、出荷樽数の増加に結びつけていた。しかし、鹿島庄助休店から鹿島利右衛門・小西利右衛門との取引開始までに2年を要し、その間の出荷樽数が大幅に減少していたことから見ても、販売主導権は下り酒問屋が掌握しており、酒造家が販売先を選択する自由は持ち得ていなかったと考えられる。つまり、柚木が示した魚崎の事例も本稿で示した事例のいずれもが、江戸市場で主導権を握る下り酒問屋を通して販売拡大を目指したのであり、上方の酒造家が江戸での需給調整や販売主導権を掌握することまでを視野に、廻船所有を行っていたとは考えにくい。一般化するためには他の酒造家の事例蓄積を待たなければならないが、本稿での分析からは、生産量拡大の成果を商機に応じて江戸市場に結びつけるための手段を、維持・強化しようとする前者のような酒造家個別の経営拡大志向にこそ、酒造家が廻船を所有する動機があったと結論付けられる。

<sup>46)</sup> 前掲注1) 240 頁、また、前掲注7) で上村雅洋もこの点に酒造家の廻船所有の動機を求めている。

<sup>47)</sup> 前掲注4) 243 頁

<sup>48)</sup> 前掲注1) 324 頁